

幽霊の物語から靈感の話へ 読

現代日本の世相の解

著者	高岡 弘幸
雑誌名	怪異・妖怪文化の伝統と創造 ウチとソトの視点から
巻	45
ページ	233-243
発行年	2015-01-30
その他のタイトル	From Ghost Stories to Inspirational Tales of Spirits: Reading the Times of Modern Japan
URL	http://doi.org/10.15055/00002163

幽霊の物語から靈感の話へ

——現代日本の世相の解説

高岡 弘幸

1 語りかけなくなった幽霊

近年の民俗学や日本文学、歴史学などの怪異・妖怪文化研究においては、柳田國男による妖怪と幽霊を峻別した定義が廃棄され、幽霊を妖怪や化け物、怪異のなかのひとつのカテゴリーとして研究する立場が優勢となっている。しかし、もしあえて、柳田とはまったく異なる角度から幽霊と妖怪を区分しようとするならば、明確な分水嶺がある。それは、幽霊は、この世で生きている人間に、自分の物語を語りかける存在だということである。

『今昔物語集』巻27の伴善雄の話は、日本の怪異史上最も古い幽霊譚のひとつであるが、伴善雄が偶然出会った男に対し、次のように物語る。

(事例1)

国中に疫病が蔓延していた頃、ある男が、衣冠束帯の正装に身を包んだ高貴な男と出会う。彼はかつて応天門放火事件に連座し伊豆に配流され、その地で没した大納言伴善雄であり、この疫病は国中すべての者が死ぬようになっていたものを、感冒程度にとどめるよう取り計らったのだという。

この事例のように、生者の目前に現われた幽霊みずからが何者かを述べたり、恨みつらみや成仏できない理由を説明するという内容の説話は枚挙にいとまがないほどである。もっとも、伴善雄は衣冠束帯という生前の正装を身にまとって出現したのであるから、みずから「死者」と名乗らなければ、彼を知らない者にとっては「生者」としか見えなかったにちがいない。

こうした幽霊自身が物語る説話とは逆に、たとえば、幽霊がトンネルなどで、通りすがりのドライバーに目撃されるというような、「物言わぬ」幽霊譚も数多く見られる。しかし、このタイプの怪談では、幽霊を目撃した人間が、後日、その場所で悲惨な事故があったことを知る、または、事前に事故のことを知っていたと説明される。

いずれのタイプの幽霊譚も、この世に生きている人間は、幽霊の出現という日常生活の平安を乱す「ノイズ」を、理解可能な「シグナル」、つまりは「物語」に変換していると捉えることができるわけである。

幽霊は生きている人間に語りかける。それは、幽霊と何らかの関係を持つ人間が消去しようとしている過去、あるいは、すでに隠蔽してしまった過去を思い出させるために、死者が幽霊となって、まったく関係のない人間にまで、自分自身の過去や成仏できない理由などを知らせるために出現するのである。とりわけ、非業の死を遂げた者が幽霊となった場合は、安永寿延が述べるように、「幽霊は過去の存在でありながら、つねに現在の表層へとはいあがろうとする。それは生者による死せる者の忘却に対する、死者の側からする懸命の抗議であるだけでなく、とにかく過去を美しいヴェールでよそおいがちな生者への死者による絶望的な反撃である」（安永 1974）と捉えることができるだろう。

ところで、作家の京極夏彦氏は次のように幽霊を定義している。「理由はどうあれ、死んだ筈の人間が現れたなら、それはやはり幽霊なのである。但し、固有名詞を失ってしまったなら、それはお化けと呼ばれるしかない。何故なら幽霊は『死後も意識－自我が保存される』という原則に則ってこそ定義されるものだからである」（京極 1999）。たとえば、出産時に死亡した女性が氏名（固有名詞）を名乗って出現、または、目撃者が死者を特定できた場合は「幽霊」だが、彼女の氏名が失われ、忘れ去られると、「ウブメ」という「妖怪」（お化け）に含み込まれてしまうということである。

そうすると、幽霊の物語とは、死者がほかの誰でもない「私」という存在を維持するための行為と捉えることもできるだろう。明治以降、生活文化が近代化するにともない、河童や天狗といったキャラクター化された妖怪たちは次第に姿を消すことになった。妖怪の仲間である幽霊もまた同じ運命をたどるはずであった。しかしながら、幽霊だけは強靱な生命力（？）を保ち続け、現代にあっても幽霊の存在を信じる人の数はけっして少なくはない。現代の怪談の一種である都市伝説の主役は幽霊であることが、それを明確に証明している。キャラクター化された妖怪以上に前近代的な存在であるように思える幽霊は、実のところ、近代的な「自我」（私という存在）と深く結びついたものであり、そのため、近代以降も生き残るばかりか、怪異の代表選手として増殖したと捉えられるのかもしれない。

いずれにせよ、幽霊は人間がつくりだした想像上の怪異・妖怪の一種であるにすぎない。したがって、幽霊の語り、幽霊の物語とは、私たち生者の物語ということになる。すなわち、生者は死者である幽霊から言葉を借りて、今私たちが生きている生活世界（この世）の世相、そして、死後の世界とはどのようなものなのかを説明し、理解しようとしているのである。

ところが、ここ 10 年ほどのあいだに、幽霊が生者に対して何も語りかけなくなってしまったのである。たとえば、福岡大学の私のゼミに所属する学生たちと集めた都市伝説に、次のようなものがある。

(事例 2)

道を歩いていると、一人の靈感があるという男子学生が、「ここ、やばいから早く行こう（通りすぎよう）」といった。

ここには、生者にメッセージを送る幽霊も、日常生活を乱すノイズも見ることができない。明確なメッセージやノイズがなければ、生者はそれらをシグナルに変換して解読することは不可能である。この話を「都市伝説」のひとつとして紹介したが、それは、もはや幽霊が登場しないからであり、あえて名づけてグループ化するならば、「靈感の話」もしくは「霊に関する話」となるであろう。

幽霊はまことに雄弁に自己の物語を語ってきた。それこそ、幽霊の自己存在証明であるからである。ところが、幽霊の物語が消失したのである。それは同時に、幽霊の物語を紡ぎ出してきた私たち「生者」の物語の消滅でもあるだろう。では、こうした「幽霊の物語」から「靈感の話」への変容は、いつ頃、どのような理由で起こったのであろうか。この小論では、その問題を考えることにしたい。

2 二つの幽霊譚

2005 年、前任校である県立高知女子大学のゼミの学生たちと収集した都市伝説のなかに、次のような二つの怪異譚があった。

(事例 3)

ある若い女性が会社の同僚から携帯電話を譲り受けた。ある日、残業のため深夜、自動車で帰宅中、携帯電話が鳴った。通話ボタンを押すと、かけてきた若い女性が「あなた誰？」という。「これはもらったものだ」というと相手はしばらく沈黙した後、「なぜ、このケータイを持ってるの？」と叫んだ。腹がたったので電源を切ったが、また呼び出し音が大音量で鳴った。怖くなりバッテリーパックを抜こうとしたがはずれず、ついにバッテリーを引き剥がした。すると、バッテリーの裏には血糊がべっとりとついていて、気がつくやうに自動車のドアが半ドアになっていたのを閉めようとする、そこから血まみれの女性の顔が覗きこんでおり、「そのケータイは私のもの」という。

後日、いろいろと調べてみると、その携帯電話の持ち主であった女性は少し前に悲惨な事故死をしていたということだった。

別の論文で、この携帯電話にまつわる幽霊譚などから、現代は具体的な「場所」を描かない「非・場所性」の怪異が主流となっていることを指摘したことがある。古典的な幽霊譚では、その場所がかつて悲惨な事件や事故があったと語られることが多い。すなわち、幽霊譚とは人（死者）の記憶であると同時に、幽霊が出現する

「場所」の記憶でもあったわけである。しかし、スーパーマーケットやコンビニエンスストアの蔓延により地域の風景が画一的となり、土地独自の記憶が失われると、1990年代以降、幽霊が出現するのはパソコンやプリクラ、携帯電話といった特定の場所とのつながりを一切持たない物の画像や画面上となった。そこで、こうした現代的な特徴を持った怪異譚・幽霊譚を、私は「非・場所性」の怪異と分類、命名したわけである（高岡 2006a）。そうした現代的な特徴はともかく、ここに登場する幽霊は明確なメッセージ、つまりは生者による解釈が埋め込まれているため、古典的な幽霊物語と捉えることができる。

同時期に語られたもうひとつの幽霊譚を見てみよう。これは、当時、全国的にひそかなブームを巻き起こしていた「廃墟探検」がモチーフとなったものである。

（事例 4）

高知県の室戸岬にある大きなホテルの廃墟は幽霊が出ることで有名である。そこで、数名の若者たちがそこを探検することにした。

廃墟となったホテルのなかを歩いていると、ひとりの女性の携帯電話が鳴った。見ると非通知での着信だったが、通話ボタンを押した。すると若い女性の声で「このホテルのトイレに閉じ込められているので助けて欲しい」という。なぜ番号を知っているのか不思議に思いながらもトイレを探し出し、ドアを開けてまわったが誰もいない。たちの悪いいたずらだと思って帰ろうとしていると、また非通知で電話がかかり「さっきは助けてくれて、ありがとう」といわれた。

この怪異譚でも、幽霊がわざわざ携帯電話を用いて救いを求めていることから、先の怪異譚と同じく「非・場所性」の怪異と分析したことがある（高岡 2006a、b）。その際には気づかなかったのだが、あらためてこの怪異譚を読み直してみると、幽霊が自分自身に関する情報を何ら発していないことがわかる。もし、本来の幽霊物語であるならば、携帯電話を用いて助けを求めてきた女性の死亡原因などが、末尾に付け加えられるはずだからである。すなわち、「非・場所性」という共通した現代的な特徴を持つ二つの怪異譚は、幽霊が生者に何らかの物語を語るという根本的な点に関して、相反する内容を示していたのである。

3 「沈黙する幽霊」の増殖

以下の事例も、かつて別の論考で紹介したことがある（高岡 2006b）。いずれも、「非・場所性」の怪異であると同時に、幽霊からのメッセージ、つまり「物語」を成立させる語りが欠落しており、さらには、2005年に収集したという共通点も持っている。

最初に、高知県香美郡土佐山田町（現・香美市土佐山田）の山奥にあるとされた「見返り橋」の話を見てみよう。

(事例 5)

4、5 人の友人同士が自動車に乗って「見返り橋」に行った。この橋を渡ったあたりから、一人が急に気持ちが悪くなったと言い出し、エンジンもストップしてしまった。ふと窓を見ると、白い色の手形がべったりとついていて、急いで逆戻りし、橋から離れてしばらくすると、エンジンの調子がもとに戻った。

この話の別のバージョンでは、「見返り橋」を渡って山を上ると旅館跡があるが、そこはかつて火事があったて多くの人が焼死し、経営者は自殺したらしい、との説明が付け加えられる。このバージョンの場合、「見返り橋」の怪異の説明になっているようだが、注意して読むと、橋と旅館の火事とは何ら関係のないものであることがわかる。つまりは、「見返り橋」そのものにまつわる「記憶」、あるいは、「物語」はまったく語られていないということなのである。

また、高知県安芸市においても、同じような「見返り橋」の話が語られていた。

(事例 6)

数人の仲間がオートバイに乗って、安芸市にある「見返り橋」を見に行くことになった。その橋ではなぜか「振り向いてはいけない」といわれているにもかかわらず、一人が面白半分で振り向いた。彼は、突然「早く帰ろう」と叫び、その後はずっと黙り込み、先に帰宅した。携帯電話をかけたが連絡がつかないので、心配になった仲間が彼の家を押しかけると、「3 日たったら話す」という。しかし、その 3 日後、彼は自殺してしまった。

この話のなかには、橋で振り向いてはならない理由や、男性が自殺した理由はまったく見あたらない。つまり、幽霊が語る（生者が解釈する）物語が、先に示した土佐山田の別バージョンの話以上に何も語られていないのである。

さらに、その時期、高知県内では、「馬首トンネル」と総称される一群の怪異譚が頻繁に語られるだけでなく、インターネットの掲示板でも、実際の場所を特定するために、具体的な体験談（捏造が多いのはもちろんのことだが）をもとにして活発な意見交換が行なわれていた。

この「馬首トンネル」譚では、話者が「馬首トンネル」の話をしているにもかかわらず、正直にも「あるトンネル」と述べるものがほとんどであった。すなわち、高知市周縁部の山奥にある小さなトンネルで何らかの怪異に遭遇した（と認識した）時、このトンネルこそが「馬首トンネル」なのだと解釈する様子が浮かび上がる、とても奇妙な内容の怪異譚である。

(事例 7)

数人の友人と自動車で心霊スポット巡りに出かけた。あるトンネルに入って中央付近まで行くと、急にエンジンの調子がおかしくなり、かかりが悪くなってしまったが、何とかトンネルを抜けると調子は回復した。トンネルのなかで、生首が飛び去るのや、女の人の叫び声を聞いた者もいた。

この怪異譚においても、生首が飛びまわる理由やエンジンが不調となる原因は語られない。ただ単に、「怪異」に遭遇すると語られるのみなのである。

そうすると、上に記した事例はいずれも高知県でのものなので、東京や大阪などの大都会ではもっと変化が早かったとも考えられるが、2005 年頃を境にして、幽霊が生者に向けて何も語らなくなり始めたのではないかと推測することができるのではないだろうか。今から約 10 年前の 2005 年、幽霊たちのあいだにいったい何が起こったのであろうか。

4 福岡の幽霊譚・都市伝説の現在

そこで、「幽霊の 2005 年問題」を、2011 年、福岡大学に赴任して以来、ゼミの学生たちと収集を継続して行なっている都市伝説の事例から考察を行ってみることにしよう。

まず確認しておきたいのは、現代においても、とても古典的な幽霊譚も多く見られるということである。

(事例 8)

福岡市東区のある中学校では、校庭の同じ場所でけが人が続出する、授業中に黒い人影が廊下を横切る、体育館で首のない人影が見えるなどの出来事が起こる。この中学校は、移転した神社の跡地に建てられたことや、明治時代初期に政府の 3 人の役人が竹槍で惨殺され、近くの川の中洲に遺棄されたのが、そうした怪異の原因ともいわれている。また、黒田藩の処刑場があったせいではないかという噂もある。さらに、学校近くのマンションの駐車場で生首が飛んでいるのを見たという噂話もある。

(事例 9)

小倉駅前の某百貨店の地下駐車場や 8 階のレストラン街、2 階と 3 階の売り場などに、幽霊が多く目撃されるそう。元々この土地は墓地であったらしく、骨を供養せずに建設したから祟られるなど、建設前から噂があった。自殺者も 2、3 人いるらしい。

(事例 10)

福岡市中心部の某巨大商業施設では、建設中に自殺者が出て、オープン当時は壁にかけられた彫刻が吹っ飛んだり、エレベーターが落下したりしたそうだ。

こうした古典的な幽霊物語や怪異譚が同時に語られているからこそ、「靈感」の話の特異性が際立ってくるのではないだろうか。

続いて、先に示したような、物語の形を成さない事例をさらに挙げてみることにしよう。

(事例 11)

博多駅前の某ビルに勤めている男性によると、トイレの個室で肩をたたかれたり、誰もいない隣の事務室から声が聞こえたりするという。

(事例 12)

飯塚市内の某中学校のトイレでは、赤ちゃんの泣き声がするという。

事例 11 と 12 では、まだ幽霊譚と分類してよい内容を持っているが、次の三つの事例となると、幽霊ではなく、あえて表現すると、ただの「霊」の話といわざるをえないだろう。

(事例 13)

福岡市内の某大学の学友会館 4 階に忘れ物を取りに帰ると、「足跡」に追いかけられる。

(事例 14)

糸島市内の某高校では、夜、3 階の渡り廊下を歩いていると、「何者か」とすれちがうが、そのすれちがったものが何かはわからない。実際にある教師が体験したという噂もある。

(事例 15)

八女市内の某中学校では、屋上の掃除のときに「見た」人がいるらしい。

さて、以上の話を見渡して、最初に気づくのは、話の「長さ」が異様に短いということである。それは、幽霊などの怪異の原因、つまりは幽霊の物語と、それに加えて、怪異に遭遇した結果が消滅しているからである。

では、なぜこのように話が極端に短くなっているのだろうか。こうした都市伝説や怪異譚は口コミ以外に、インターネット上に書かれ増殖するのが、現代という時

代である。ところが、同じインターネットでも掲示板やブログではなく、数年前から、その主流はツイッターとなっている。周知の通り、ツイッターは140字以内という字数制限がある。そのため、自然に話が短くなったというわけである。さらには、こうしたツイッターの字数制限という形式が、口コミで話を組み立てる際においても影響を与えているのではないかと考えられるのではないだろうか。

以下にツイッターに記された怪異譚をいくつか挙げてみよう。いずれも驚くほどの短さである。

(事例 16)

中洲の雑居ビル。階段をハイヒールで登る音が聞こえる。また、営業中の店のなかを子どもが走ってきて、奥で消える。

(事例 17)

三瀬峠。とにかく、「何か」が出ると噂になっている。

(事例 18)

北九州市の某滝。夜になると、白い服を着た霊が現われる。写真を撮ると、それが写る。

(事例 19)

北九州市の某所では自殺者の霊がでる。赤い橋で女の霊が立っている。

(事例 20)

北九州市の某トンネルでは老婆の霊が追いかけてくる。

(事例 21)

宮若市の某ダムに自殺した霊が出る。殺人事件が起き、それで殺された霊が出る。犬の死骸10頭、衰弱した26頭が遺棄されていた。

(事例 22)

木屋瀬の某ダム。ガチでヤバいらしい。

(事例 23)

うきは市内の赤い橋で写真を撮ったら、橋の上と下に心霊が写った。

また、若い世代を中心として、物語を組み立てる能力の低落化も指摘しておかなければならないかもしれない。たとえば、テレビでは過剰な視聴率競争の結果、話

をゆっくりと展開するのではなく、とにかく短いワンフレーズをタレントたちが連発し、それをまたテロップにことさらに大きく示すようになっている。つまり、「脱線」や「寄り道」を含めて、長い物語を実感、体験したことがないため、とにかく「結論」だけを語ったり、知ろうとする傾向にあるのではないかということである。

政治の世界においても、わかりやすい（ということは具体的な内容に乏しい）ワンフレーズのキャッチコピー的な政策が横行している。これも「結論」の単純化に大きな影響を与えていると指摘することも可能だろう。ただ、それは政治家の能力の問題だけではなく、そのように決定へのプロセスを省略し、かつ結論（めいたこと）をことさらに単純化しなければ、私たち国民の耳には届かないということなのかもしれない。そうすると実は、若者に限らず、世代を超えた私たち自身の物語を作成し、語る能力の凋落こそが問題とされるべきなのかもしれない。

いずれにせよ、こうしたことは、確かに話の長短という形式を決定するかもしれないが、内容をも規定すると考えるのは早計にすぎるであろう。そこで、もう少し、現在の怪異譚に耳を傾けてみよう。

（事例 24）

久留米市内の某ビルの話。靈感の強い人にいわせると、そのビルの4階から霊がこちらを見下ろしているらしい。

（事例 25）

靈感の強い甥は小学生だった頃、学校から福岡市内の自宅マンションに帰ると、家の門のところに女の子の霊がいるのを何度か見た。また、その女の子の霊もいたかはわからないが、その甥の部屋は霊が集まりやすかったらしい。彼の父親も靈感が強かったらしく、確かにその部屋には霊がいるといったらしい。

もちろん、かつての幽霊譚においても、「靈感」が強いため幽霊を目撃したという内容の話があるが、少なくとも近世以降は、まったく宗教的な能力に恵まれていない者であっても「平等」に幽霊に出会うことが可能であった。

かつて、私はある小論の注記に、「これは大学で教鞭をとっている私の実感にすぎないのだが、近年、『靈感』があるため怪異現象を目撃したことがあるという学生が急増しているように思えてならない。これを逆にいうと、靈感のない者は怪異と遭遇できないわけであり、学生たちは靈感の有無という形で、異界の『個人化』を表現していると考えることができるのではないだろうか」（高岡 2006b）と記したことがあるが、まさに、当時の私の予想を証明してくれていると思えるのである。そうすると、事例 11 から 23 までの 13 の怪異譚については、「靈感が強いため」と付け加えられたバージョンも存在するかもしれない。そのくらいの説明であれば、ツイッターの 140 字以内に収めるのもたやすいからである。

ただ、この「異界の個人化」はもう少し慎重に解きほぐす必要のある問題であるように思える。少し以前から、若者同士の会話では、同年齢・同学年であるにもかかわらず「丁寧語」を用いることが指摘されている。丁寧語や尊敬語は、上下や親疎といった人間関係を示すが、それは別の言い方をすれば、対人関係において「距離をとる」ということでもある。そうすると、異界の個人化は、親密な人間関係を嫌う世代だからこそ生じたことになるだろう。また、親密な人間関係を厭うことから、一方的な物語を押し付け合うのではなく、みんなが納得し、ネット上で「炎上」させられない「妥当」なレベルの話に落ち着けるのが得策であるため、物語が単なる「靈感の話」に変化したと見ることもできるかもしれないのである。

5 見えない災厄の時代

以上のような分析はまだ表面的なものにとどまる。私たちは「幽霊の2005年問題」について何ら回答を与えていないからである。私は、何よりもまず幽霊が多くの者にとって不可視の怪異であると語られていることに注目したいと考える。

古典的な幽霊譚のように、幽霊が見えるということは、それに対処できるということである。つまり、幽霊が怒っていたり、哀しんでいたたりするならば、成仏できるように供養すればよいわけである。その逆に、微笑んでいるならば、「守護霊」と判断して差支えないかもしれない。

そうすると、幽霊が不可視の存在になったということは、いつ、どこから、どのような形で襲われるのかわからないということであると捉えられるはずである。現代は不況が続き、どのように頑張っているとしてもそれが報われないばかりか、安定しているとされてきた有名な大企業の倒産も何ら不思議なことではなくなった。そうしたきわめて暗い時代に生きざるをえない私たちの生活実感が、不可視の不気味な幽霊として表象されているのである。

さらに、こうした考えを推し進めていくと、次のようにもいえるように思える。現代の日本では不況であること、脱出口が見えないことが「当たり前」のものとなってしまう。「マイナス」の状況が当然のものとなり、あえて「災厄」につきまといわれる話を必要としなくなった。そこで、災厄をもたらす存在であった幽霊が、ほとんどの者には不可視であるばかりか、感じることもできないものに変化し、「靈感がある敏感な者」だけが災厄を感じとるような話に変化したというわけである。

このように考えるならば、「幽霊の2005年問題」という謎も、自然に解き明かせるのではないだろうか。

年々、時の流れが加速するように思えるため、もはや忘れ去られてしまっているかもしれないが、2005年前後は、ニートやワーキングプア、ロストジェネレーション（1970～82年生まれ）などの問題が、毎日のようにマスコミで大きく取り上

げられた時期である。そうした時代の世相を描いた、『希望格差社会』（山田昌弘）、『下流社会』（三浦展）、『生きさせろ！—難民化する若者たち』（雨宮処凛）といった研究や評論が相次いでベストセラーとなった。

すなわち、2005 年頃は不幸や災厄が見えにくくなったり、あるいは、それに見舞われるのが当たり前となったりという時代が始まった時期であったわけである。この世相のなかで、「この世」（生活世界）のあり方、生活実感を如実に表わす怪異譚が、幽霊物語から「靈感」の話へと変化を遂げたということだったのである。

ここで、現在の怪異譚をもう一度ていねいに読み直してみると、「靈感」を持つとされる者も、「霊」の存在を察知し、事前に災厄を避けているだけであることがわかる。災いをもたらす「霊」が出現した理由は明らかにされず、「霊」を成仏させるなどの根本的な解決策も示されていない。すなわち、「靈感」を持つとされる者も、「霊」がもたらす災厄に対してまったくなす術もないことが、実に正直に語られているわけである。現在も増殖の勢いを増している「靈感の話」は、日本人の苦悩がますます深くなり続けていることを語ってくれていたのである¹。

【引用・参考文献】

- 京極夏彦「江戸化物草紙の妖怪画」アダム・カバット校注・編『江戸化物草紙』小学館、1999 年、7-8 頁。
- 高岡弘幸「幽霊の変容・都市の変貌—民俗学的近・現代研究に向けての試論」『国立歴史民俗博物館・研究報告』第 132 集、2006 年（a）。
- 高岡弘幸「ケータイする異界—怪異譚の現在」小松和彦編『日本人の異界観』せりか書房、2006 年（b）。
- 安永寿延「幽霊、出現の意味と構造」『国文学解釈と教材の研究（特集・日本の幽霊）』学燈社、1974 年、46 頁。

¹ 私は、今後、景気が回復することになれば、災厄の原因と、それへの対処法を明確に語る古典的な幽霊物語が復活する可能性もあると考えている。